文語歌曲　鎌倉

谷田貝常夫

作詞　芳賀矢一（文部省唱歌）

明治三十三年に地理教育のためとて「鐵道唱歌」發表せられしが、東海道線を辿りながらも大船にて横須賀線に立寄り、鎌倉のこと、四聯に亙りて歌ひ込まれたり。その十年後に世に出でたるこの歌は、「尋常小學讀本唱歌」として鎌倉の歴史を西から東、北へと手際よく織込めり。

一　七里ケ濱の磯傳ひ　稻村ケ崎名將の　劍投ぜし古戰場
　こゝに現はるる名將とは新田義貞のことにて、幕府に對抗して鎌倉に進軍せり。鎌倉は後方を山に圍まれたる天然の要害にて、切通しなる細き通路のみにより攻撃をしかけるも、幕府方の守り堅く、殊に西の極樂寺切通しは激戰となりたるが、義貞、黃金の太刀を海に祈り投じたる　ところ、龍神それに應じて潮を引き、義貞、鎌倉市街に討入たり。足利高時自刃し、百五十年　ほどつづきたる鎌倉時代ここに終焉せり。西紀一三三三年のことなり。

二　極樂寺坂越え行けば　長谷觀音の堂近く露座の大佛おはします
　鎌倉七口の一つ、極樂寺切通しの入口近くに今もあるが「極樂寺」なり。鎌倉時代初期、西大寺叡尊の弟子忍性（にんしやう）が開祖となり七堂伽藍、子院ならびをりし上、施藥院などの福祉施設も整ひ　たり。本尊は釋迦如來像、大陸傳來の清涼寺式と呼ばるゝものにて興味を惹く木造なり。
　この坂を降ると左手にあるは「長谷寺」なり、楠の一木から彫り出（いだ）されたる、高さ九米を越ゆる十一面觀音あり。種々の傳說まとふも、忍性との關係ありともせらる。この先が謂はゆる　「露坐の大佛」、鎌倉初期に作られ幾度もの災厄に見まはれたるも、品格の高さを見す。與謝晶子　が「かまくらや　みほとけなれど釋迦牟尼は　美男におはす　夏木立かな」と詠みしも頷けるとこ　ろにて、そが阿彌陀佛とて拘泥せられぬところなり。

三　由比の濱べを右に見て　雪の下村過ぎ行けば　八幡宮の御社
　八幡宮は豐前の「宇佐神宮」を總本社とし、全國に二萬社以上ありといふ。そを大安寺の僧が御告げを受け京都の裏鬼門にあたる男山に「石清水八幡」として勸請すると、源氏は氏神として信仰し、源義家は元服時に「八幡太郎義家」と名告るまでに至る。父の賴義が奥羽での戰のとき に鎌倉に立寄り、あらたに勸請したるがこの歌詞の「八幡宮」なり。賴朝はそれまでの小さ　き若宮を現在地に移し，鎌倉の都市作りの中心に据ゑたり。

四　上（のぼ）るや石のきざはしの　左に高き大銀杏（おほいちやう）　問はばや遠き世々の跡
　鶴岡八幡宮へと登る階段に在りし大銀杏、樹齡千年を越ゆといふも平成二十二年、大風にて倒潰、源氏の正統性が了はることとなる實朝暗殺の現場も、失はるゝに至れり。

五　若宮堂の舞の袖　靜のをだまきくりかへし　返せし人をしのびつつ

血腥き鎌倉幕府の歴史の中に、この靜御前の物語は華やかさを添ふ。亂世の中に、女性（にょしょう）の一途に生くる様も涙をそそる。京都神泉苑にての雨乞の舞に他にまさつて效果をあげたる白拍子の靜は、見初められて義經の妾となる。賴朝に追はれて逃れたる義經の吉野にありと聞きて後を　追ふも、義經探索の僧兵に捕へられ、遂には鎌倉に送らる。

詮議あつてのち、若宮の廻廊に賴朝、政子を始めとして幕府の主立ちたる面々、靜の舞を見むものと竝びゐる。若宮の外、さらには山の上にも人々、聲も聞えず舞姿も見えぬに集ひたり。現はれた靜に政子、「靜を見るにわが朝に女ありとも知られたれ」とつぶやく。靜御前、詮ずる　所敵の前の舞ぞかし、思ふ事を歌はばやと思ひて、

しづやしづ賤のをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

吉野山嶺の白雪踏み分けて入りにし人の跡ぞ戀しき

この歌を聞き賴朝、己れを莫迦にせり、九郎義經の世を願ひをり、憎し憎しと怒りたるを、政子、靜以外いかで御前にて舞はうか、女ははかなき者なれば許されたいとかばふ。靜、賴朝の氣色惡しと悟りて立戻り、

吉野山嶺の白雪踏み分けて入りにし人の跡絶えにけり

と最後の五字を言直したれば、賴朝機嫌をなほす。後に多くの引き出物あり。（義經記より）

六　鎌倉宮にまうでては　盡きせぬ親王（みこ）のみうらみに　悲憤の涙わきぬべし

新田義貞が鎌倉を攻め落し、それまで鎌倉幕府のために壹岐に流されてゐた後醍醐天皇が都に戻られ、いはゆる建武の中興成し遂げられしが、武士達の不滿解消できず、足利尊氏擡頭す。それに反して兵を集めた後醍醐天皇の皇子護良親王は、逆に尊氏に捕へられて鎌倉の土牢に幽閉され、足利家内紛の餘波から二十八歳の若さにて弑されたり。その親王の遺志を讃へて明治天皇、悲憤の情より土牢の地に神社を建てられ、「鎌倉宮」と名付けらる。近くに覺園寺あり。足利尊氏の再建になるもの故、今次大戰中は周圍から忌み嫌はれたりと言ふ。

七　歴史は長き七百年　興亡すべてゆめに似て　英雄墓はこけ蒸しぬ

英雄墓とは、賴朝の墓を意味するなれど、この一代の英雄の墓にしては狹き中に朽ち果てむばかりの自然石五輪塔なり。實朝政子の墓も別の所にあれど、矢倉の中にて、落石の危險ありと　ある。日本の權力者の墓たるや、かくのごときかとの感慨に搏たる。この歌、今より百年以上　前に書かれたるものなれば、「歴史は長き七百年」とせらる。

八　建長円覺古寺の　山門高き松風に　昔の音やこもるらん

建長寺は鎌倉幕府五代執權北條時賴の創建にかかるものにて、諸國の民情視察をせりとの傳說生れ、謠曲「鉢木」に結實す。圓覺寺はその子時宗の創建によるものにて、中國より招聘せる禪僧無學祖元を開基とす。忍性に助力したりもしたが、時、世界帝國元（モンゴル帝國）の膨　脹政策、朝貢壓力に對し、終始果斷なる強硬姿勢を貫きたるは師の禪僧の情報力、影響力もあ　らむ。二度の國難を乘越えたる後、三十四歳にて世を去る。その膽力にあやからんとせしか、　今もおほくの人參禪す。世界的なる佛教學者鈴木大拙も、夏目漱石、島崎藤村、哲學者の三木　清もその一員なり。

この歌曲、内容豊かなる歌詞にくらべ、リズムは冒頭二小節の繰り返しにて書かれ、ミ、ファ♯、ソ、ラ、シの五音のみにて作曲されたれば素人目にも単純なりと見ゆ。されどホ短調の曲にて、それとなく悲しみを感じさするところが好きといふ者多し。

（平成二十九年六月十八日受附）